近所の人に対する敬語
——札幌における敬語調査から(4)——

荻　野　綱　男

1. はじめに

東京大学言語学研究室有志は，柴田武教授を中心に，昭和53年7月に札幌で敬語に関する社会言語学的調査を行なった．調査で得られた全資料はコンピュータに入力され，筆者の作成した GLAPS という方言調査用のパッケージ・プログラムで処理加工された．

この調査では2人称に対する敬語だけを扱っているが，話し相手（聞き手）としていろいろな人を設定し，それぞれの人にこれこれのことをいうときどういう言い方をするかをたずねている．話し相手のことを本稿では「場面」と呼ぶ．調査ではいくつかの調査項目を10場面にわたって質問した．その10場面は，大きく二つに分けられる．一つは抽象的なわくぐみから設定された6場面であり，もう一つは「近所の人」4場面である．前者については，分析結果の一部をすでに報告している[1)2)3)]．本稿の目的は，近所の人に対する敬語について考察し，それがインフォーマントの社会的属性とどのように関連しているのか，また，都市化によって近所の人に対する敬語はどのように変化していくのかを明らかにすることである．

2. 調査の概要

調査の目的は「都市化によって敬語は多様化する」という仮説の検証にあった．「都市化」の程度の差を，昔からの居住形態である一戸建て住宅と最近発達してきた居住形態である高層マンションとの差と考え，札幌の宮の森・円山地区のマンションと一戸建てに住む500組の夫婦＝1,000人をサンプリングで選び，結果的に503人に面接調査することができた．

「敬語の多様化」とは何かについてはいろいろ議論のあるところであるが，大きく分けて二つのことを考えた．一つは，敬語の使い分けの体系(これを単に敬語体系と呼ぶ)そのものの多様化であり，たとえば，「都市化によって敬語の使い分けが細かくなる」とか「都市化によって新しい敬語表現が使われるようになる」とかいう変化が見い出されるのではないかと考えた．もう一つは，敬語の使われる場面の多様化であり，都市化によって見知らぬ人との接触が増え，今までと同じ敬語体系を使っていても，たとえば場面のとらえ方などに何か変化が生じてきているのではないかと考えた．その典型として「近所の人」に対することばづかいを調べようとしたのである．

調査した敬語項目は6項目あるが，そのうちの一つ，B項目の質問文は次のとおりであ

る.

「どこそこの電話番号を知っているか」とたずねられて,「知っている」と答えるとき,「知っている」というところをどのように言いますか.

1. 同じ年頃の親しい友人
2. あまり親しくない人で,少し年下の人
3. 親しい人で,少し年上の人
4. あまり親しくない人で,少し目上の人
5. ふだんことばづかいをいちばん気にしないで話ができる相手
6. ふだんいちばん丁寧なことばで話をする相手
7. 近所の {ご主人/奥さん{ (インフォーマントと同性)
8. 〃
9. 〃
10. 〃

これらのうち場面1から場面6の6場面については,場面の設定の議論を文献 1) で述べたので,そちらを参照してほしい.

場面7から場面10の近所4軒は,最初の敬語項目 (B項目) のところで調査者側が指定した.インフォーマントに選ばせることをしなかったのは,インフォーマントが自分とつきあいのある人のことを多く思い浮かべ,そういう人たちばかりを選んでしまう可能性があるためである.インフォーマントの家を訪問する前にその隣近所をあらかじめ見ておいて,それぞれの家の位置関係を確認し,次のような原則で聞いていった.

①一戸建ての場合は,右隣——左隣——向かい——向かいの家の隣——2軒隣——……とし,インフォーマントの家の門から近い順に4軒を選ぶ.

②マンションの場合は,右隣——左隣——同じ階の他の家——真下——真上——真上下の隣——……とし,インフォーマントの家の玄関から近い順に4軒を選ぶ.

③たとえ「顔を知らない」場合でも,空家でないなら (つまり,人が住んでいる限り) 答を引き出す.

④これらの原則に合わない場合,臨機応変に4軒聞いてくる.

調査対象のマンションは5階以上のエレベータつきのものに限定してあったので,小戸数のものもなく,上記の原則の例外はなかったようである.

こうして決定した近所4軒を含む10場面について他の敬語項目の調査を行なっていく.すべての敬語項目がおわったあと,場面7から場面10で想定した近所の4人とのつきあいの程度をたずねる項目に移る.

3. 分析の方針

われわれは,いろいろな相手と話をするとき,同一の意味内容をあらわす場合でも,話し相手によってちがった表現形式を使い分ける.これが (聞き手に対する) 敬語である.敬語の使い分けのようすは,話し手がどんな人かによっても差が見られる.このような「話し手による差」を考えていく場合,それを二つの面からとらえていくことが可能であ

る．一つは，さまざまな「聞き手」をそれぞれどのような位置に（どのくらいの待遇レベルで）待遇するかという面での差であり，年齢の上下を重視する人がいたり，地位の上下を優先する人がいたり，あるいは親疎だけを考えて敬語の使い分けをするというような差である．もう一つは，そのようにとらえられたそれぞれの聞き手に対してどのような敬語表現を用いるかという面での差であり，敬語の知識の多い人が尊敬語形や謙譲語形をよく使うとか，学生はそれらをあまり使わないとかいうような差である．前者のような差を「場面把握」の差，後者のような差を「敬語体系」の差と考えてもよい．

まず，近所の人に対して特有の敬語表現があるわけではないことを指摘したい．B項目「知っている」の503人のデータでは，場面1から場面6の抽象的「6場面」で異なり107種の表現形式（語形）が得られた．しかし，これに近所を加えて場面1から場面10までに広げて集計しても，異なりは117種になるだけである．

したがって，インフォーマントの社会的属性によって近所の人に対することばづかいにどのような差があるかという問題に対し，「敬語体系」の差は考慮する必要がない．ということは，「近所の人という場面」がさきの抽象的「6場面」のわくぐみの中のどのへんに位置づけられるか，「場面把握」の差だけを調べれば充分であるということになる．別の観点からいえば，抽象的「6場面」の分析[1]によって各人の頭の中の「敬語体系」は一応明らかになった．ここではそれを実際の日常生活の場で具体的にどう運用するかを見ていこうとするものである．

さて，このような場面の位置づけの分析には，さきに筆者の提案した「丁寧さの数量化」[2]の手法が便利である．これは，語形と場面のクロス集計表にもとづいて，語形と場面のそれぞれの丁寧さを計算する方法であり，その結果から場面の丁寧さを見れば上述の分析が可能になるわけである．

語形の種類が117もあると，全体を一目で見渡すことができない．たとえば，各場面でどんな語形があらわれるかを見るためにパーセンテージを算出する場合など，117種を数個のカテゴリーに分類・統合したほうがわかりやすい．しかし一方では，語形の統合をすると，はたしてそれが妥当であったかどうか疑問が生じる．そこで，原則として本稿では語形の統合をまったくせず，117種の語形をそのまま扱うことにする．

4. 全体的傾向

はじめに，丁寧さの数量化の概略的説明のために，117種の語形を4語類に統合した場合の結果を見てみよう．それが表1である．語形の統合は文献1）と一致させてあるが，「その他」に入るような特殊な語形は無視してある．表1のような表を一般にクロス集計表と呼ぶ．「丁寧さの数量化」の手法はクロス集計表の数量化と同じことであり，それぞれの場面・語形の「丁寧さ」はクロス集計表からおのずと決まってくるものである．一般にはクロス集計表の縦横の各カテゴリーの「距離」（「類似度」とか「差異の程度」とかいってもよい）を求める手法と考えるべきだが，聞き手に対する敬語の場合には，筆者がそれを「丁寧さ」と見なしているわけである．

「丁寧さ」の計算法をひとことでいうならば次のようになる．

表 1 「知っている」の近所を含む数量化（4語類に統合）

	場面	5	1	2	3	近所 7	近所 8	近所 9	近所 10	4	6	合計
語形	丁寧さ	1.00	2.47	6.16	7.72	8.41	8.53	8.61	8.82	9.64	10.00	
シッテル類	1.00	438	371	164	90	53	46	48	37	10	4	1261
シッテマス類	3.35	39	110	280	279	297	298	279	286	243	195	2306
シッテオリマス類	3.37	7	17	39	88	104	112	126	127	142	143	905
ゾンジテオリマス類	4.00	1	3	9	31	29	24	37	39	98	148	419
合計		485	501	492	488	483	480	490	489	493	490	4891

表 2 「知っている」の近所を含む数量化
（117語形そのまま）

	場面	丁寧さ	答の総数
最もぞんざい	5	1.00	550
親しい友人	1	2.63	542
親しくない年下	2	6.05	530
親しい年上	3	7.80	527
近所	7	8.29	522
	8	8.49	513
	9	8.57	525
	10	8.77	525
親しくない目上	4	9.64	532
最も丁寧	6	10.00	523

○各語形の丁寧さは，各語形がどのくらいの丁寧さの場面にどれだけ出現しているかによって計算する．

○各場面の丁寧さは，各場面でどのくらいの丁寧さの語形がどれだけ出現しているかによって計算する．

さて，語形の統合をしないで丁寧さの数量化をしてみよう．クロス集計表そのものは「117語形×10場面」になって大きすぎるのでここでは省略し，10場面それぞれの丁寧さだけを表に示した（このクロス集計表は札幌調査の報告書[4]の6章に載せてある）．表2の答の総数が表1の合計欄と異なっているが，これは，①表1では「その他」を「答なし」であるかのように処理しているのに対し，表2では「その他」というものがそもそもないこと，②一人が一場面で二つ以上の語形を併用している場合，表2ではそれぞれを独立の答と見なして二つ以上に数えているが，表1では，もしそれらが同一の語類に含まれるときは一つと数えていること，以上の二つの理由による．表2のほうが表1よりも「正しい」分析であることは明らかである．

表2を見ると，場面の丁寧さが1.00から10.00の範囲にちらばっていること，その中で近所4軒が全体として場面3と場面4のあいだにはさまっていることがわかる．つまり，近所の人の待遇レベルは「親しい年上」と「あまり親しくない目上」とのあいだに位置づけられており，近所の人には全体的にかなり丁寧なことばづかいをするもののようである．

場面7—8—9—10がこの順に丁寧になっていくということは，家に近い人とはつきあいが多く，ややぞんざいないい方をするが，遠い人とはつきあいが少なく，比較的丁寧ないい方をすると解釈できるが，差が小さいので，はっきりとは断言しがたい．

5.　属性別に見た近所の位置づけ

インフォーマント503人を属性によってグループ分けして，それぞれについて丁寧さの数量化をしてみよう．取り上げる属性は，性別，住居形態，出生地，年齢，学歴とする．

その結果を図1に示した．表2とちがって近所4軒は加重平均によって一つにまとめて

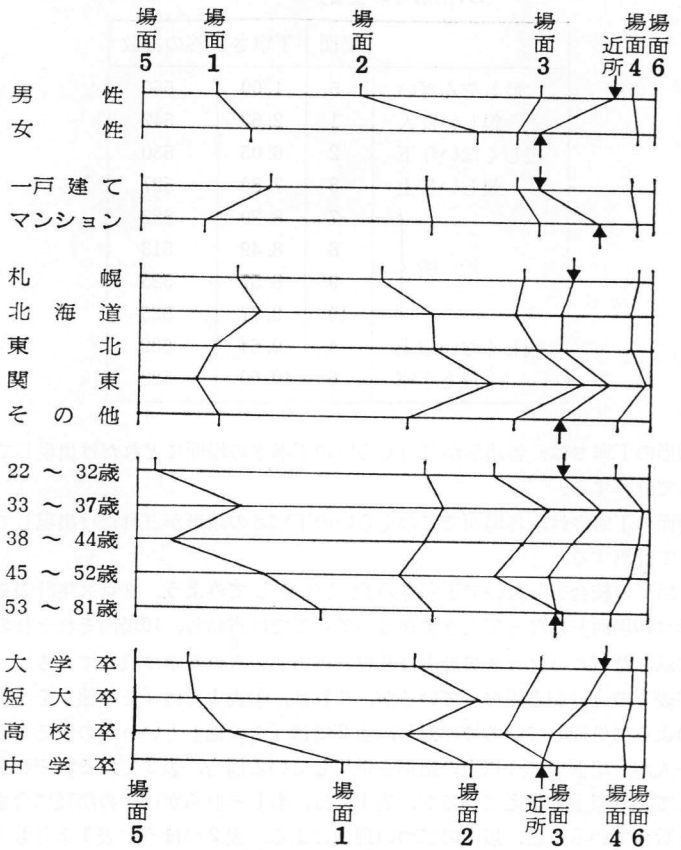

図1　属性別の近所の位置づけ

ある．加重平均は表2の場合なら次のように計算される．

$$近所=\frac{8.29\times522+8.49\times513+8.57\times525+8.77\times525}{522+513+525+525}=8.53$$

図1は，各属性別に表2のような10場面の丁寧さを求め，近所を一つにまとめて7個の点をプロットし，それらを上下に線で結んでできあがったものである．図1では場面5を左端に，場面6を右端にとり，その幅が一定になるようにしてある．すでに述べたように[2)]，実際には属性によってこの幅の広狭がちがっていたり，左右にずれていたりするとも考えられる．しかし，ここでは「6場面」に対して近所の人がどう位置づけられているのかを見ることが目的なので，あえて全体の幅を一定にした．

図1を見ると，近所をぞんざいなほうに位置づけているのは，女性・一戸建て・中学卒であり，反対に丁寧なほうに位置づけているのは，男性・マンション・大学卒であることがわかる．出生地差については，関東生まれの人が他の出生地の人よりも近所を丁寧なほうに位置づけているように見える．ただし，関東生まれは場面2や場面3もやや丁寧に位置づけているので，それも考慮すると，さほど近所をとりたてて丁寧に位置づけているわけではないとも考えられる．

なお，ここで用いているような丁寧さの数量化の方法では，各グループごとに単独で数量化しているために，各グループ内の場面の丁寧さのちがいはわかってもグループ間のちがいは明示しえない．たとえば，図1で男女差を見ると，近所の人に対することばづかいは男性のほうが女性よりも丁寧であるように見えるが，実はそうではない．場面7から場面10の出現語形だけを見る限りにおいてはほとんど差はないのである[2)]．しかし，抽象的「6場面」を丁寧さの数量化の第2の方法で分析した結果から，女性のほうが，男性よりも全体にことばづかいが丁寧で，「6場面」の位置づけが男性よりも右のほうにずれていることがわかった．したがって，図1のように場面5から場面6までの幅を一定にする表示をすると，「6場面」のわくぐみの中での近所の位置づけがちがってくるのである．図1では具体的にどんな語形を使っているかはわからない．しかしここでは場面のとらえ方だけが問題なのである．図1では各グループ内での場面の相互の位置関係だけがあらわされているにすぎないことに注意してほしい．

6. 近所づきあいの多少

女性や一戸建て居住者が近所の人を比較的ぞんざいに位置づけているということは，それらの人は近所づきあいが多く，近所の人と親しいためにぞんざいなことばづかいをしているということではなかろうか．

今回の調査では，近所の人(同性)に対することばづかいをたずねたあと，それら4人の人とのつきあいの程度について，次の5段階のうちのどれにあてはまるかを聞いている．

1. お互いの家に行って，あがって話したりすることがある．
2. 会うと，立ち話をしたりすることがある．
3. 会うと，あいさつのことばをかわす
4. 会うと，会釈をする．
5. 顔を知らない．

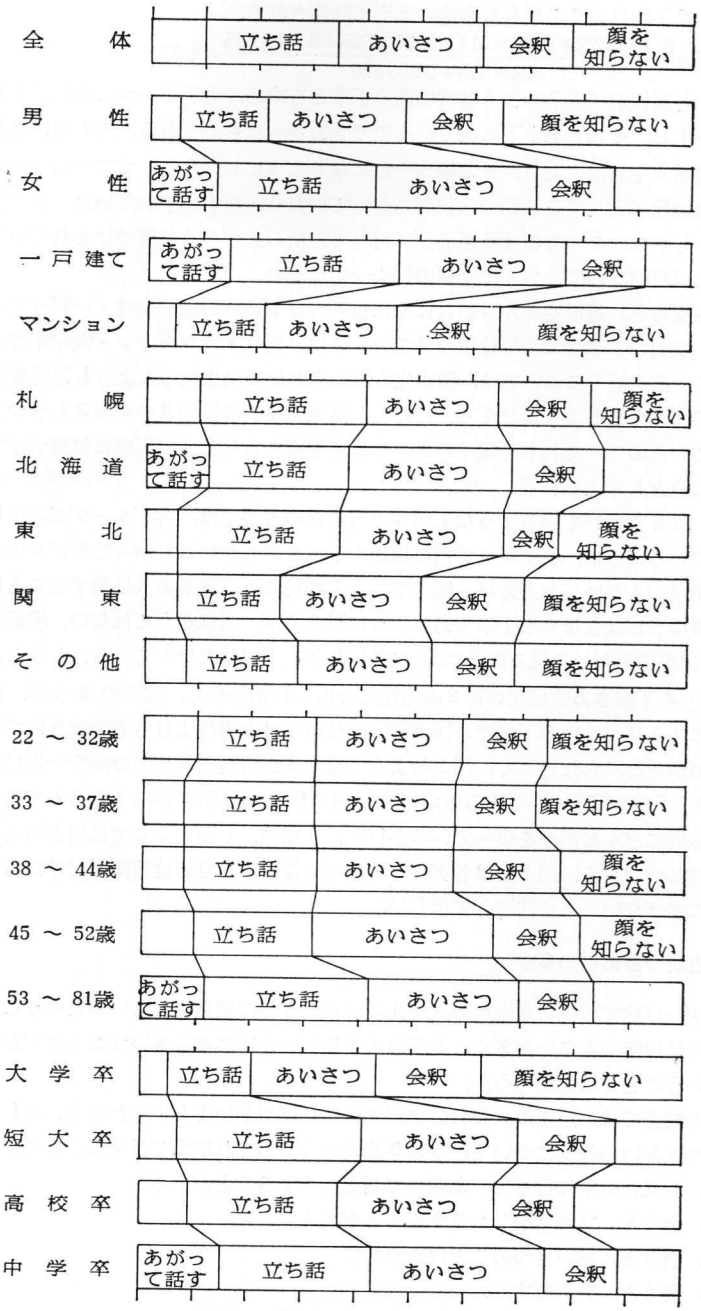

図2　近所づきあいの程度

503人のインフォーマントが近所4軒の｛ご主人／奥さん｝とどの程度のつきあいがあるかについての答2,012（実際は「答なし」もあるので1,995）を集計すると，図2のようになる．

図2を見ると，近所づきあいの多いのは，女性・一戸建て・中学卒であり，少いのは，男性・マンション・大学卒であることが歴然としている．短大卒はほとんどが女性であるため，女性のパターンに近い．出生地差・年齢差も一応見られる．

以上の結果から，近所づきあいの多い人は，近所の人をぞんざいなほうに位置づけている人と一致しているということができる．

7. 近所づきあいと場面差

近所の人の場合，つきあいの程度によってどのくらいことばの使い分けがあるのだろうか．近所4軒を一まとめにして，それをつきあいの程度別に5段階に分け，丁寧さを数量化してみると表3のようになる．

「あがって話す」はかなりぞんざいなほうに位置づけられるが，「立ち話」から「会釈」まではあまり差がなく，場面3と場面4のあいだに位置している．近所づきあいの差による丁寧さのちがいは，抽象的わくぐみの「6場面」ほど大きくないことも注目すべきであろう．

表3のような計算をインフォーマントの属性ごとに行なった結果が図3である．「あいさつ」「会釈」「顔を知らない」は加重平均によって一つにまとめ，「あいさつ以下」としてある．

これで見ると，男性と女性では，女性のほうがつきあいの程度に関係なく一貫して男性よりも近所の人をぞんざいに位置づけていることがわかる．調査では，女性に対しては「隣の奥さん」，男性に対しては「隣のご主人」というように相手を指定していることを考えると，この結果は，女性どうしのほうが男性どうしよりお互いを親しいものととらえ，

表 3 「知っている」の場面差と近所づきあい

	場　面	丁寧さ	答の総数
最もぞんざい	5	1.00	550
親しい友人	1	2.79	542
あがって話す	近所1	6.09	203
親しくない年下	2	6.61	530
親しい年上	3	8.55	527
立ち話	近所2	8.80	520
あいさつ	近所3	10.00	555
顔を知らない	近所5	10.12	461
会釈	近所4	10.16	340
親しくない目上	4	10.61	532
最も丁寧	6	11.00	523

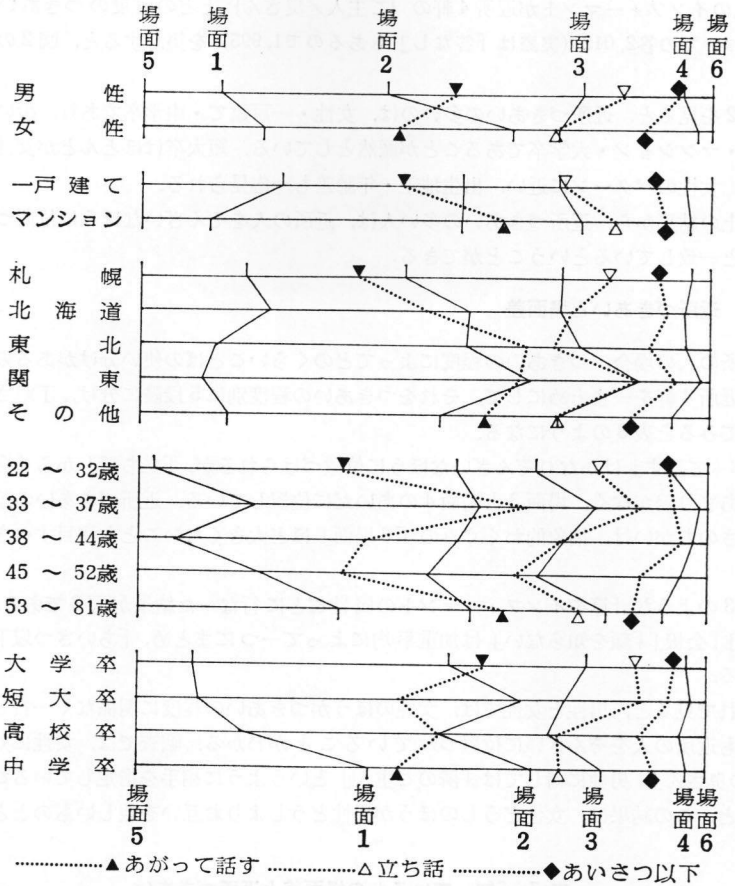

図3　属性別に見た近所づきあいと場面差

ぞんざいなことばづかいをしていると解釈できる．

一戸建てとマンションを比較すると，「あいさつ以下」にはあまり差がない．しかし，「あがって話す」つきあいの人に対して，一戸建て居住者はぞんざいなほうに位置づけているのに，マンション居住者は丁寧なほうに位置づけている．

これには二通りの解釈が考えられる．一つは，「あいさつ以下」には住居形態による差がないと見なして，たとえ同じように「あがって話す」つきあいだとしても，近所づきあいの多い一戸建て居住者の「あがって話す」は，近所づきあいの少ないマンション居住者の「あがって話す」よりも親密なつきあいをあらわしているという解釈である．たとえば，一戸建てではしょっちゅう行き来しているようなつきあいが多いのに，マンションではそれほどのつきあいでなく，たまにあがって話すだけなのかもしれない．調査ではそこまでつっこんだ聞き方をしていないので，両者とも単に「あがって話す」という答に入ってし

まう結果になる.

もう一つの解釈は,「あいさつ以下」でも一戸建てのほうがマンションよりもぞんざいなことばづかいをしていると見なすものである.これは,男女差と同様に,マンション居住者は一戸建て居住者よりも近所全般をあまり親しくないものととらえ,丁寧なことばづかいをしているという解釈である.

「立ち話」程度のつきあいの場合も一戸建てとマンションとでとらえかたに差が見られることから,ここでは一応後者の解釈のほうが妥当であると考えるが,前者の解釈も排除しきれない.

出生地差についても同じような解釈ができる.すなわち,札幌・北海道生まれは近所をより身近にとらえ,関東生まれはそれほどでもない.それがことばづかいに反映しているということである.

年齢差の折れ線のパターンはやや特殊であって,一貫しない部分が目立つ.「あがって話す」が22〜32歳と38〜44歳,45〜52歳ではかなりぞんざいなほうに位置づけられているのに,33〜37歳と53〜81歳ではそうではない.これに対する解釈は保留しておく.ただ,「立ち話」の折れ線が場面3(親しい年上)の折れ線と似ており,両者を比べると若年層よりも高年層のほうが「立ち話」を場面3よりもやや下位に位置づけていることに注意したい.

学歴差は,住まい差や出生地差と同じように解釈できよう.

図3において,もしそれぞれの点線の折れ線のパターンが縦にまっすぐになっていたら,近所の人に対することばづかいの様相は非常に単純なものとしてとらえられたはずである.すなわち,図1に見られる差異はすべて図2に見られるつきあいの比率の差で説明でき,近所の人に対することばづかいは,その相手とのつきあいの程度だけによって決定されるということである.しかし,実際はそうではなかった.同じようなつきあいの相手に対しても,インフォーマントの属性によってことばづかいはかなり異なっているのである.

8. ま と め

近所の人に対することばづかいを全体としてみると,女性・一戸建て居住者・低学歴層(・関東生まれ以外)がぞんざいなことばづかいをし,男性・マンション居住者・高学歴層(・関東生まれ)が丁寧なことばづかいをする.その理由は,女性・一戸建て・低学歴層(・関東生まれ以外)は近所の人と親密なつきあいがあるのに,男性・マンション・高学歴層(・関東生まれ)はつきあいが少ないからである.

しかし,こうした近所づきあいの多少が反映しないように集計してもなおことばづかいの差が見られる.したがって,具体的な個々の相手とのつきあいの差だけでなく,近所全般をどうとらえているかという点でも差があると考えるべきであろう.

ところで,現代社会の動向の一つとして「都市化」ということがあげられる.札幌での調査は,都市化を一戸建てとマンションの差と見なして企画されたわけだが,都市化にはもっといろいろな側面がある[5].高学歴化も都市化の指標の一つと考えられるし,札幌にと

っては関東などからの人口の流入の増大も都市化の重要な一面である．調査の結果明らかになった「住まい差」,「学歴差」,「出生地差」のどれから考えてみても，都市化が進行するにつれて近所づきあいが少なくなり，近所の人に対することばづかいがより丁寧なものになっていくということは疑いのないところであろう．

この調査・研究は，科学研究費特定研究（1）「社会関係・場面に応じた言語行動」（研究代表者・柴田武）によって行われたものの一部である．また，本稿は，1980年1月27日に金沢で行なわれた特定研究柴田班の会議で発表したことを補筆・修正したものである．貴重なコメントを下さった柴田班のかたがたおよび草稿の段階で目を通して有益な助言をして下さった福嶋秩子（旧姓尾崎）・御園生保子の両氏に感謝する．

参 考 文 献

1）尾崎秩子・御園生保子・藤田克彦・荻野綱男（1980）「話者の属性から見た敬語の使い分け――札幌における敬語調査から(1)――」国語学第120集
2）荻野綱男（1980）「敬語における丁寧さの数量化――札幌における敬語調査から(2)――」国語学第120集
3）荻野綱男（1980）「敬語表現の長さと丁寧さ――札幌における敬語調査から(3)――」計量国語学第12巻第6号
4）柴田武監修，荻野綱男・藤田克彦・尾崎秩子・御園生保子編著（1980）『都市の敬語の社会言語学的研究――昭和53年度札幌における敬語調査報告――』自家版
5）西田春彦・新睦人（1976）『社会調査の理論と技法（Ⅱ）』川島書店，pp. 137～149

――東京大学文学部助手――